

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 9 月 5 日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00212

研究課題名（和文）日本の中世音曲の記譜法を新たに考案する－謡曲・声明・民俗芸能

研究課題名（英文）Innovating notational systems of Japanese medieval chants

研究代表者

藤田 隆則（Fujita, Takanori）

京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター・教授

研究者番号：20209050

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本の中世芸能（能楽、声明、語り物芸能）など、歌うことを中心とする芸能の伝承者へのインタビューを踏まえつつ、実践者にとって、必要十分と思われるような記譜を考え、試作し、発表した。記譜は、音の高さと長さによる構造を明確に再現できるものだけを指すのではない。それぞれの音楽伝統の中で、実践者に対して、音楽の進行や展開を促すヒントをあたえるような、あらゆるものを、記譜と捉えることができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で扱った、能楽、声明、題目立は、いずれも少人数の担い手や共同体によって伝承されているもので、伝承においては、ひととおり技術が「できる」ことがまず重要だ。しかしそのためには、芸能のつくりが「わかる」ことも、また、それを「伝える」ことも、とくに現代では、必要になってきた。芸能を残すことだけが目的であれば、現代、録音や録画も簡単にできるので、心配もない。しかし、それらは音や動きを外部から見るとはならず、それだけでは楽しむことが難しい。楽しく「できる」ためには、「わかる」ことが不可欠である。「わかる」を促すのが記譜である。たとえるなら、料理のレシピである。その社会的意義は小さくはない。

研究成果の概要（英文）：In this study, I contrived different type of notations that would help actors and musicians of traditional performing arts promoting oral tradition. Based on the interview sessions with actors and musicians of traditional performing arts, I came to a conclusion that notations are not just narrowly defined as media to represent musical notes that denote pitch and duration, but include and cover any items that tempts dancers and singers to remember continuing melodies, and to develop and create variations continuously.

研究分野：民族音楽学

キーワード：謡曲 楽譜 記譜 能楽 民俗芸能

1. 研究開始当初の背景

申請者が研究対象としている日本の中世起源の能楽は、少子化や社会環境の変化によって、従来のような家元制度への参加による実践が成り立たなくなっている。また申請者のもう一つの研究対象である、日本の村落に伝承される中世芸能も、従来の宮座のような、限られた複数の家を中心とした伝承がすでに成り立たなくなりつつある。これらの芸能は、文化財や世界遺産などに指定されることを通じて、一定の関心の広がりを得ることに成功しており、それらに対する学術的な記録も充実してきている。しかしながら、実践そのものに深く関心を持つ者（聴衆）の数は、確実に減っている。これが研究を開始する、社会環境上の背景である。

能楽の世界では、演奏の規範となる原理を、書かれたかたちにまとめる試みが、数多く存在してきた。明治時代の後半（約100年前）から存在している、地拍子の楽譜化と理論化の試みが、その代表である（『能の地拍子研究文献目録』参照）。本研究が取り組む課題は、演奏の実践が「できる」ではなく「わかる」という感覚を提供することであるが、その先達となる試みが、この百年で数多くあったことを、申請者は認識している。そして、現代、時代の変化にあわせて、改良の余地が多くあることも、申請者は認識している。これらの認識が、申請者自身の中での、研究開始の背景となっている。

2. 研究の目的

研究対象として、能楽（のどくに音曲や囃子）、村落に伝わる中世芸能（とくに題目立）、声明（とくに天台、浄土真宗系）を中心にすえ、書かれた記譜が使用されている実態を調査する。インタビューによって、全体の実践の中で、どのような時間や空間で記譜が参照されてきたか、大切にされているか/されていないか、などを把握する。その上で、実践者の広がりを生み出すため（いわゆる普及のため）に、もっとも適切な方向へと、記譜を改良してゆくべく、伝承者や鑑賞者らとの議論をつづける。能楽に関しては、新しい「記譜」を中心に据えたブックレットの作成をめざす。

研究代表者は、実践プロセスの中に「わかる」という過程が、これまで以上に、組み込まなければならないと考えている。さもなければ実践者人口の広がりや望めず、実践だけではなく、学術研究の基盤さえ失われかねない。そのために研究者がしなくてはならないのは、音楽理論を適切に反映した記譜の改良であろう。

3. 研究の方法

・能楽について

記譜については、学校教育の場、市民講座やワークショップにおいても、様々な試みがなされてきた。だが実際、子供のときから芸を学び、謡も口うつしで覚えてきた能楽師自身は、記譜法の存在や必要性をどうとらえるのだろうか。また、記譜が一般に流通することにより、どのような変化が起こると想像しておられるのか。能の記譜を検討していくプロセスの中で、インタビューを行う。そして、その内容を反映させながら、能

の総譜を作成する。さらに、インタビューで得られた知見を盛り込みながら、できあがった総譜をテキストとした、注釈作業を行なっていく。

・題目立について

申請者が以前より研究をすすめてきた奈良県の「題目立」は、中世の語り物芸能を代表する民俗芸能である。いくつかの旋律型が用いられるが、それらはどのように使い分けられるのであろうか。牧野英三による先行研究の批判的継承、すなわち、実践者（伝承者）自身にとっての感覚にそった旋律型研究をおこなう必要がある。そのために、練習に参加し、また長年上演が途絶えていた「石橋山」復元のプロセスにもかかわる。その中で、実践者に継続的なインタビューを行う。そして伝承者が求めている方向での、記譜の改革作業を試みる。

・声明について

日本の声楽（音曲）の記譜の中で、もっとも進化をとげているのは、声明の記譜である。記譜にしめされた豊かな記号の組み合わせと、実際に歌われる音曲の音の動きとの間には、しばしば見過ごすことの出来ない食い違いが存在する。その実態について、とくに京都在住の天台声明の実践者らの練習に参加しつつ、意見交換を行う。また旋律を図形によって表現する回旋譜の是非についても、新しい記譜の可能性について意見聴取を行う。

4. 研究成果

2018年度には、天台声明の実践者、題目立の実践者などに対してインタビューを行なった。両者のインタビューはいずれも、実際の練習、稽古の過程で行われたものであるが、そこで得られた主なポイントは、記譜には「書かずに済ませる部分」を残しておくことが必要であるということである。その空白は、技術を紙に書かずに秘密にするという意味ではなく、実践者自身の自由裁量の部分を、あえて残しておくことを意味する。こういった考え方を踏まえて、2年目の2019年度は、題目立の「石橋山」の復活公演のための文字テキストの校訂作業を行なった。ここで心掛けたのは、句読点を打つか打たないかという点を強く意識しながら作業することであった。題目立の文字テキストに、句読点を打つことは、しばしば、使用できる旋律型の候補を限定させることになる。したがって、句読点を打つことによって、校訂者自身の解釈つまり研究者自身の旋律選択に関する理想が、必ず入ってくることになる。作業の結果として得られた教訓は、研究者は、自らの解釈の恣意性をできるだけ意識する必要がある、という点である。3年目の2020年度には、題目立の復活上演「石橋山」のDVDを作成したが、その付録として「題目立《石橋山》復活上演詞章」を公開した。

2018年度から継続して行なってきたのは、能楽師へのインタビューである。特に2020年度には、従来能楽の世界には存在しなかった総譜（すべてのパートを並行させて記す楽譜）の作成に向け、集中的なインタビューを行なった。インタビューで得られた言説や考えは、2022年3月に公刊した著作『能 羽衣 を解剖する』の中の各所に反映されている。その著作の中でも、特に羽衣一曲の全体の総譜（「縦書き譜」）には、随所に、インタビューの中で発せられた意見が反映されている。

作成された総譜は、出版という形だけではなく、最終年度には、羽衣の動画に貼り付ける形でも、公開することができた。

伝統音楽には、記譜の改良は不要である、という考え方が、現在でも強く存在している。しかし、「記譜は正確ではない」ということを恐れて、開発・公開をあきらめるのではなく、新しい記譜の工夫が新しい演奏慣習が生み出すことの可能性の方に、研究者は、強く加担すべきであると考えます。本研究の成果の意味・意義・重要性がはっきりするのは、現在の時点ではない。それがわかるのは、もう少し先の時点である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 藤田隆則	4. 巻 16
2. 論文標題 研究ノート「題目立の旋律型」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本伝統音楽研究	6. 最初と最後の頁 43-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Takanori Fujita	4. 巻 9
2. 論文標題 The Community of Classical Japanese Music Transmission: The Preservation Imperative and the Production of Change in Noh	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Ethnomusicology translations	6. 最初と最後の頁 1-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14434/emt.v0i9.28817	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤田隆則	4. 巻 35
2. 論文標題 能の型付にみる手段の目的化	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 民族藝術	6. 最初と最後の頁 55-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藤田隆則	4. 巻 12号
2. 論文標題 『師伝書』に授受された謡の体系と謡のあるべき姿	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 神戸女子大学古典芸能研究センター紀要	6. 最初と最後の頁 121-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田隆則	4. 巻 第64巻1号
2. 論文標題 大内典著『仏教の声の技 悟りの身体性』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 音楽学	6. 最初と最後の頁 66-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田隆則、天野文雄、阿部泰郎、時田アリソン、川森博司	4. 巻 12号
2. 論文標題 公開研究会「古典芸能研究の横断と総合」シンポジウム総合討論	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 神戸女子大学古典芸能研究センター紀要	6. 最初と最後の頁 12-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田隆則	4. 巻 なし
2. 論文標題 楽譜と演奏 (コラム・・・20)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 加藤好郎・木島史雄・山本昭 (共編) 『書物の文化史-メディアの変遷と知の粹組み』 (丸善出版)	6. 最初と最後の頁 174
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 藤田隆則
2. 発表標題 能楽における「息」の仕組み (その1) - 「呼吸」はどのように行われるか
3. 学会等名 人間工学会関西支部大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤田隆則
2. 発表標題 能楽における「息」の仕組み(その2) - 「息を合わせる」の実質的内容
3. 学会等名 人間工学会関西支部大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Takanori Fujita (author of chapter 8)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 212-231
3. 書名 Thought and play in musical rhythm, chapter 8	

1. 著者名 藤田隆則・丹羽幸江	4. 発行年 2019年
2. 出版社 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター	5. 総ページ数 32
3. 書名 語りの立体化そして復曲 - 狂言、能、題目立	

1. 著者名 藤田隆則(編)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター	5. 総ページ数 171+24
3. 書名 能 羽衣 を解剖する - 音曲面を中心に	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Noh as Intermedia
<http://noh.stanford.edu/>
<http://noh.stanford.edu/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------